

学位論文題名

Crime on Dickens and Dostoevsky:  
A Feature of Crime Writers

(ディケンズとドストエフスキーにおける罪：犯罪小説家としての本質)

学位論文内容の要旨

本論文は、Introduction, Chapter 1 Dickens and Dostoevsky, Chapter 2 “Inimitable” Detective Novelists, Chapter 3 Dickens and Oliver Twist, Chapter 4 Dostoevsky and Crime and Punishment, Chapter 5 Suggested Salvation of Fallen Women, Chapter 6 Martin Chuzzlewit and The Brothers Karamazov: Imaginary Parricide, Chapter 7 Our Mutual Friend and The Idiot: Murders for Love, Chapter 8 The Old Curiosity Shop and The Gambler: The Fall of the Gambler, Conclusion, Bibliography (List of Works Consulted) から構成される。

序章では、本論文の基本的な観点が述べられている。ディケンズとドストエフスキーは好んで犯罪を描いたが、「探偵小説家」とは呼べない。その理由は、両者とも多面的な作家で、社会問題、哲学的・宗教的問題、人間心理などに関心が深く、犯罪を通して人間の本質を探ろうとしたからである。ドストエフスキーはディケンズからさまざまな影響を受けたが、両者の間には差異も多い。その共通性と独自性の分析から、両作家が真に目指していたものを明らかにする。

第一章では、ロシアにおけるディケンズの受容と、両作家の関係を概観している。ロシアでは早くからディケンズが広く読まれ、ドストエフスキーも彼の作品を愛読し、両者には共通のテーマも多い。その作品の根底には共通して、社会の現実を直視するリアリストの眼、社会の悪・不公平への批判とその改善への志向があったと述べられている。

第二章では、英国とロシアにおける「探偵小説」の発展の歴史の中での両作家の位置を概観している。

19世紀の英国とロシアでは、急速な工業化・都市化に伴う貧富の差の拡大や犯罪の増加等を背景に、「探偵小説」という新しい文学ジャンルが生まれた。両作家はその発展の歴史の中で大きな位置を占めるが、彼らの作品には、「殺人、謎、探偵、謎解き」などの要素からなる、典型的な「探偵小説」の枠組みには収まらない部分がある。ディケンズは英文学史上はじめて作品で職業探偵を描いたが、作家としては犯罪の中に人間の心の闇を探り、ジャーナリスト、社会改良の実践家としては社会の教化・改善を目指していた。ロシアでは、「探偵小説」は英国よりも遅れて、違った方向に発達した。19世紀後半のロシアの「探偵小説家」たちは、ドストエフスキーの『罪と罰』を受け継いで、犯人と犯罪の方法の解明よりも、犯罪の背後にある犯人の心理や感情の描写に力を注いだ。

第三～五章では、“殺人者と堕ちた女”という共通のテーマを扱った、ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト』とドストエフスキー『罪と罰』を対比している。

第三章では、『オリヴァー・トゥイスト』について考察している。この小説で“堕ちた女”

Nancy は、善良な少年 Oliver を悪党の Sikes から守ろうとして人間性に目覚め、更生を望むが、結局 Sikes に殺されてしまう。論者は、ここには作者のリアルな現実認識と、同時代のモラルを踏まえたメッセージが示されていると考えている。

第四章では、『罪と罰』について考察している。小説の中心テーマは主人公の犯行の動機と自首に至る心理の描写にあり、その心理分析はディケンズよりもはるかに複雑になっている。

第五章では、両作品の女性像に焦点を当て、作品の正反対の結末の意味を考察している。ディケンズはビクトリア時代のモラルに沿って、Nancy と Sikes を死をもって罰したが、Nancy は Oliver を守ろうとして天使のような一面もみせる。一方、同じく“墮ちた天使”であるソーニャはラスコーリニコフに悔い改めと新生への道を示す。論者は、二人の女性の運命は正反対だが、両作家とも、“墮ちた”人間も罰を受ければ更生は可能であり、徳は必ず報われるという、共通のメッセージを伝えようとしたと考えている。

第六章では、ディケンズ『マーティン・チャズルウィット』とドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』における父親殺しのテーマと、両作家の父親との関係について考察している。

両作品では、ともに父親殺しとみられる事件が起こるが、事件の真相は小説の最後まで隠されていて、焦点は外面的・法律的に誰が犯人かよりも、精神的な罪とつぐないの問題にある。ディケンズの作品では、Jonas は父 Anthony を憎み毒を盛るが、実際は父親は発作で死んだのだ。Jonas は犯罪の露見を恐れて自殺する。『カラマーゾフの兄弟』では、父フョードルが長男ミーチャとの財産と女をめぐる争いの中で殺され、裁判ではミーチャが有罪となる。実際は、フョードルの隠し子で下男のスメルジャコフが殺害犯で、ミーチャもイワンも父親殺しに手は下していないが、精神的にその死に責任があり、それぞれに罰を受ける。

論者は、両作品とも、謎解きが筋の展開の中心にある点で、探偵小説ともいえるが、中心テーマは精神的な父親殺しにあり、父親の死を望んだ者はその死に責任があり、罰を受けるという、共通のメッセージを含んでいると考えている。

両作品には作者自身と父親との関係が大きな影を落としている。ディケンズは少年時代に父親の借金のため家族が債務監獄に入れられ、自分もつらい工場労働を強いられた。ドストエフスキーは少年時代に父親が持ち村の農民に殺害され、自分も父を憎んでいたためこれがトラウマとなり、それが作品にも反映しているというフロイドの説はよく知られている。

第七章では、ディケンズ『我らが共通の友』とドストエフスキー『白痴』における、殺人にいたる破滅的な愛のテーマについて考察している。

両作品は、細部には異同も多いが、人物の性格や事件の展開の基本構造には共通点がある。

三角関係の中心にいる女性 (Lizzie とナスターシヤ) はともに、身分の違いや汚れた過去のために恋人から身を引こうとする。Lizzie は自立した女性だが、ナスターシヤは汚れた過去にこだわり、二人の男の間で揺れ動き、悲劇を招き寄せる。

愛された男 (Eugene とムイシキン) は善人だが、信念を欠くため (二人の女性の間で一方を選ぶことができない) 死の危機にさらされる点も共通である。

恋敵の男 (Bradley とロゴージン) は、愛された男に対する嫉妬、身分上の劣等感、愛する女性への暗い情熱にとらわれ、恋敵をつけ狙い殺そうとして失敗する。二人の末路は異なるが、論者は、悪しき心には相応の罰が下るというメッセージは共通しているとしている。

第八章では、ディケンズ『骨董屋』とドストエフスキー『賭博者』における、賭博の情熱に対する罰のテーマについて考察している。賭博は法律で禁じられた犯罪ではないが、過度の熱中は人に不幸と悲劇をもたらす悪で、19世紀の英国やロシアでは大きな社会問題となっていた。『骨董屋』のお祖父さんは孫娘 Nell のため、『賭博者』のアレクセイは恋人ポーリナのために、一獲千金を狙って賭博に熱中し、結局、愛する人にも自分にも不幸な結果を招く。論者はここで、両作家がともに賭博熱の心理を知り尽くしており、特にドストエフスキーは自分も賭博に熱中して妻を苦しめた経験があり、賭博熱がもたらす悲劇を「罪と罰」として

描き出したことを強調している。

結論では、両作家は生涯にわたって強い社会的関心をもち、作家の社会的責任を感じるとともに、「完全に美しい人」という理想を追求し、犯罪を通して人間の本質を深く掘り下げようとした。それゆえ両作家は、初期の「探偵小説」の歴史に大きな足跡を残す一方で、犯罪を通して人間の本質を描いたことにより「犯罪小説家」と呼ばれるのだと結論づけている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 安 藤 厚  
副 査 准教授 瀬名波 栄 潤  
副 査 教 授 望 月 恒 子

学 位 論 文 題 名

## Crime on Dickens and Dostoevsky: A Feature of Crime Writers

(ディケンズとドストエフスキーにおける罪：犯罪小説家としての本質)

5回にわたる審査委員会の審議と口頭試問を通じて、以下を確認した。

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文で論者は、ともに好んで犯罪を描いたディケンズとドストエフスキーの作品を対比し、共通の背景として社会性と伝記的要素に注目する、socio-biographical approachとも呼べる手法によって、両作家の共通性と差異を分析した。

その結果、19世紀の英国とロシアの急速な工業化・都市化を背景として、両者の作品を「都市の文学」と規定した上で、時代と正面から向き合った両作家の人生体験や、社会と人間に対する姿勢の共通性に注目し、両者に共通する本質的な特徴として、犯罪とそれに対する罰の描写から浮かび上がる、社会性とメッセージ性をとり出したことは肯定的に評価できる。

本論文では、差異から出発して共通性の確認に至り、後代の作家の作品から見て先行者の新しい側面の発見に至るといふ、独自のアプローチによって、説得力のある成果が得られた。すなわち、論者は『オリヴァー・ツイスト』と『罪と罰』の正反対の結末に注目し、前者における死による罰と、後者における精神的な罰とを等価のものとしている。この見方は『マーティン・チャズルウィット』と『カラマーゾフの兄弟』における「父親殺し」のテーマの分析にも引き継がれ、両作品の主人公は実際は「父親殺し」に手は下していないが、父親の死を望んだ者はその死に責任があり、それぞれ罰を受けるといふ、両作家に共通のメッセージが強調されている。

また論者は、英国では単純明快な勸善懲悪物語を書いた大衆作家と見られることの多いディケンズを、ドストエフスキーと比較することにより、後者の特徴である人間の暗い深層心理に対する深い関心が、前者の晩年の作風とも共通することに注目して、両者はともに人間の心の闇に目を向け、人間の本質を追求したと結論づけている。

そのほか、法律の犯罪ではない賭博熱に対する罰のテーマを考察の対象に加えることにより、「罪と罰」を精神の問題としてとらえる本論文の視点が補強されていることも評価できる。

以上のような分析によって、ディケンズとドストエフスキーは「謎解き」に主眼をおいた「探偵小説」の作家ではなく、犯罪の物語を通して人間の本質を追求した「犯罪小説」の作家といえるという本論文の主張は、十分な根拠づけがなされているといえる。

口頭試問では、両作家の共通性と差異のとらえ方、「探偵小説」と「犯罪小説」の区別と文学史的な位置づけ、社会的な背景の理解などをめぐって議論が交わされ、論者からは首尾一貫した補足的説明が示された。

#### 学位授与に関する委員会の所見

以上、申請論文の慎重な審査と口頭試問の結果に基づき、本審査委員会は全員一致して、及川陽子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。